

# 聖書日課 『からし種』 2020.1.5-1.12

<p><b>5日 (日)</b></p> <p>サムエル上 27章</p>	<p>「その日、アキシュは彼(ダビデ)にツィクラグを与えた」(6節)。サウルの怒りから逃れて越境してきたダビデを、ペリシテの王の一人であるアキシュが受け入れる。「敵」であるはずの王によって守られるダビデ。私たちは自分の「正義」だけで闘い通せるのではない。「敵」と思う相手から受け入れられ助けられて、何とか歩ませてもらう場面があることを覚えていたい。</p>
<p><b>6日 (月)</b></p> <p>サムエル上 28章</p>	<p>「サウルは言った。『困り果てているのです。…神はわたしを離れ去り、もはや預言者によっても、夢によってもお答えになりません』」(15節)。神との交わりを失ったサウルは「困り果てて」いた。王としてのリーダーシップは神から与えられたもの。神につながり神に従う信仰においてのみ、王の働きは祝福される。神から託された務めを担う信仰が整えられるように</p>
<p><b>7日 (火)</b></p> <p>サムエル上 29章</p>	<p>「アキシュはダビデを呼んで言った…『今は、平和に帰ってほしい』」(6-7節)。戦国を生き抜く武将たちは常に誰の「味方」になるか、誰の「敵」なるかの厳しい選択を迫られた。しかしダビデは二者択一を避けて「平和に帰る道」を示され、結果としてサウルの「敵」とならずすんだ。神の導きのうちに「平和の道」を選ぶ勇気をいただけるように</p>
<p><b>8日 (水)</b></p> <p>サムエル上 30章</p>	<p>「ダビデは言った。『兄弟たちよ、主が与えてくださったものをそのようにしてはいけない。…皆、同じように分け合うのだ』」(23-24節)。疲れて戦いに参加できなかった兵士にも戦利品を等しく分け与えるようダビデは命じた。私たちはつい「頑張って働いた自分」の正当性を主張する。が、神の慈しみのまなざしはすべての人に注がれているのだ</p>

聖書日課 『からし種』 2020.1.5-1.12

<p><b>9日 (木)</b></p> <p>サムエル上 <b>31章</b></p>	<p>「サウルは剣を取り、その上に倒れ伏した」(4節)。神からイスラエルの王位を取り去られたサウルは、悲しく寂しい最期を自ら選んでいく。しかし神の深い根源的な呼びかけは預言者エゼキエルによって語られていることを覚えたい。「立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか」(エゼキエル 33・11)</p>
<p><b>10日 (金)</b></p> <p>サムエル下 <b>1章</b></p>	<p>「ダビデは自分の衣をつかんで引き裂いた」(11節)、「彼らは剣に倒れたサウルとその子ヨナタン…を悼んで泣き、夕暮れまで断食した」(12節)。ダビデはサウルたちの死に何を見たのだろうか。常に戦いに勝たねば生きていけない戦国の王たちの悲哀を感じる。しかし主イエスはその悲哀の道から私たちを救い出し、神の平和を祈り求める道に招いておられる。</p>
<p><b>11日 (土)</b></p> <p>サムエル下 <b>2章</b></p>	<p>「その後ダビデは主に託宣を求めて言った。『どこかユダの町に上るべきでしょうか』。…『ヘブロンへ』と主はお答えになった」(1節)。サウルが王位を追われたのは、祭司になり代わって神の御心を自分に都合良く求めたからだった。王は絶大な権力を託されているが、神の御心だけは自由にはできない。ダビデは最初の一步を神に尋ねることから始めていく。</p>
<p><b>12日 (日)</b></p> <p>サムエル下 <b>3章</b></p>	<p>「会いに来るときは、サウルの娘ミカルを必ず連れてくるように」(13節)。サウルは、ダビデの逃亡後、娘ミカルを別の男性に嫁がせた。ダビデは、他の女性たちと新しい家族をつくっていた。ここでも父や夫の都合で、女性たちの命が取引されていることが聖書を通して語られる。キリストが私たちにくださった命のものさしで、生きるわたしとされたいと願います。</p>